



定勢印紙集

三百七十六号





いぬ極集

信陽席杖編



發句部 四時不分

久しふりいふきくさく小極梅橋  
月ありて満空さしうぬきとれ哉  
まはげやふさちかきの家と家  
。 壁の空に掛いぬきをさるる也

道彦  
星布  
雨塘  
碩布



起やしや心乃そとれほとそと  
第木の伏屋をあらうめの花  
日ちるくも嬉しき知力ひるあ  
をせ然よりさきにやれり菴の幡

伯先  
長翠  
葛三  
其堂

又法沙や松の白ひ子むやね寐し  
たてつけて寐する山をの戸はあ  
朝風やおちり様様の交あ後と  
お城よとれ寝る方ありきなる里

澧水  
叙来  
宜頂  
丁几

相州

種也や日らとふををさく蛙  
松杉のさし出うゆしや食ひとね  
人志ふにこもりに居る榊の奈  
山の入難方さうりに来あハせし  
松風此のうねるを洗る乃山  
六月のむくまのまのあふ哉  
風をのあひらうまもや啼り子鳥  
あらしもやちり目さゆ四谷は

苔丈  
ト二  
嗽石  
渭水  
芦徑  
洞州  
大氷  
白水



泣ぬきをいふらつれん聖身也  
 ちりそめて聖きく白くむら芒  
 隣を記家といはれ支少親きぬた  
 七子のめいぬとても親子なき  
 松の本枝をぬ煮るる秋の風  
 かくは唐何ほいともおもひまし  
 梅の香や糸の續きく百乃く  
 松の戸やきより時めく今に海  
 よ海おのまももむらば梅のむ

京 月居  
 武州 蓬谷  
 相州 東杏  
 桂露  
 来人  
 未去志  
 丹人  
 暮玖  
 五班

眉子つく扇形箱を茶さかり  
 此ほかに名のほふあれ福寿の料  
 雪 乃わたり里の名は何は月夜  
 水汲子傳の出介りくさ乃秋  
 法をぬききくい志るへし海と云  
 山をれいまの聖もやうし毒のる  
 夕さてもるきねるりくまほやき  
 きさくねをふもあは志る堪哉

江 成美  
 自来  
 雪鳥  
 五渡  
 五解  
 化一  
 一阿  
 上毛 菅石



花のくさし秋のたうたる廣野哉  
山里や栲あつたれのもそち時

南菜  
五棟

あま子捨らうしあま月のうちとよめ  
真乃栲や種外子あまのあま  
秋の香とろいどつを持ふるし  
もろとよハやわらう種いあまの星  
米素をくまやかくく遠くも心は

江戸  
是道  
真松  
席道  
春咲  
東川

柳をささくしきとよめとあまのさし  
春の雪入るものにて寐たりたり  
まつむのえをささくそらぬあまのさ  
聖乃栲のあまを栲たるさ遠哉  
冬の栲木立にくつる栲火か奈  
似る栲やとてものさしに栲まる礼  
瘦し般の層あまて教ふ栲くし  
水島のまは子あつたぬあまのさ  
雨乃栲人をささくし径の南

尾陽  
信中  
士朗  
栲香  
露三  
何翠  
香山  
島天  
慈明  
花溟  
梅曉



ちるるらハ教子一てまの物操  
けあ子ちりちき秋の何し哉  
虫去の米子習け 在冬安し  
入梅のくれ嵐啼くせ雲礼あり  
三日月をうけはは秋とあるに危  
梅くの中やけははくめとき  
教志大子習ハ写るくをよたり  
十夜や日の何そか子名わたる  
麻ふりに刈つめふて写取可南

如水  
竹窓  
曉夢  
如竹  
此聲  
虎風  
教志  
明井  
巴仙

朝露やそ日くし乃人新菫  
草くや紫ふ海に写るそさる為  
け秋や山を越礼ハはとら家  
おら杉や樹唱くくハ日のくり  
相を仇子寐によつれて子親  
星くもにもの戸を忍は目哉  
葉咲て紫の戸まてそ刃く連危  
薄め乃里ハ梅おく毛り何那  
束ぬまも忘れぬほとの園うあ

玄透  
五桂  
青圃  
林鳥  
青翠  
箏孝  
時習  
素文女  
既白



るがせみいよく啼て晴し免  
おの梅香よこらよき小窓々友  
山里やるふれきハの輝しと礼  
潮古の火も消ん斗そ蜀黍魂  
風ちそ日おそ氣を礼相ひと葉  
美しの人そよあきけしさくら  
鹿鳴やおくれさあの日け申之  
志と梅の昼よりお乃長閑也

其山  
杉支  
文貫  
和水  
兔汁  
柔雄  
克己  
兀雨

唱子引上もていぬあま礼なり

在甲陽

世徳

白梅の香も月能ふるおほあま  
河骨やあふじ持むきそむの候  
ちんうと梅よふれて房里々あ  
心法とちく、永冬暑たり妻の風  
雨ふふハふれ宵るよての川

荷涼  
吸川  
礎高  
雀二女  
洞氷

夏のおや月ハ満をさくめさる  
半返の鞭やおそしと夕しと礼

洋水  
五雲



管より痛し枕はひらにをるふ智  
畫教の花に手つよき日影うち  
人もかくありたきを結そ川柳  
山はひそは老ゆ人よ終ら礼ぬ  
夫つ雪子ほのくを忘まけり  
楯とるる柳ひと木や一筆  
おく起や暑のまを結まぐり  
系人と又や角刀のみやひ哉  
鯨の来り風阿るる一の二月哉

文外  
橋臺  
方也  
完固  
敬之  
箕山  
兔園  
若童  
志良野

葦や人よいよや海乃乃を  
人縁し十圍のまつの下若童

可都里  
杯度

むよ智の啼もりほりに鬮の春  
初をや松の系さるひゆきを結  
あまのみに志ほを阿はき哉  
松風とつもりてを川時  
若童のひめ出たり詠は風も後  
影坊乃阿やしき月のおはあ

京  
蒼乳  
信中  
奥洞  
麥之  
霧竹  
馬十  
杜月



白きくの曇らぬあしたの哉  
松又むき譲りて時の様なる菊  
風やふかき秋乃松花を  
免雲 志厚 太老

旅まぐらうくるまむと相にし忘  
山風子粒の曇乃はくうなるし  
おちやふりほなるき山さうさ  
お時の日ハ志川さなり花は花  
登殿の雲に思ふのそをさるし  
江戸 築兆 阿即 古今 其竹 一登

あちてもつ燈さこひ九月長  
潮やきこみりたる時練のあへ  
山ちの灯はあたりあなる鹿のま  
叢叢色も風つしとそ啼るる  
雲のねやとこもほほ山のある  
改風子やせても梅のまやき  
打久はあまの何しほとそきた  
小ね何しし登る考のつらね  
上毛 鷗鳥白 信申 食古  
魚青 耕喜 素菜 如醉 文考 雲巢



夕ぬくのそは降空や冬うほへ  
その実や日乃出能露のそもを  
喜るるそくおくくも虫あはれ有り  
旋花や風持も記るき砂河系  
山の鐘響るよりも響に々あり  
夏阿さきこころもよ喜を鉢氏哉  
風の香梅えううの響ねよりぬ

眉長  
可龍  
桃三  
雀尚  
仙羽  
雲路  
崇宇  
吐文

信中

燐のきく坊うたや秋のやほ  
を坊うけよ風の響あり庭はほき  
月を望むおるう免あかさ人の家  
身のをとをよほれて月の二ね哉  
善坊や門に一一くほ一太根  
洞とるるあるうれよあふは喜の水  
鱖さきき衣着て出たり雨乃秋

其凝  
宇全  
鳥曉  
民州  
一專  
常人  
以明  
素榮

信中

乙



毛子を遊み志なり寿乃山  
 山彦より久して啼ぬらん志智  
 妾の中や二る十日のころは礼  
 きぬさうらんを寐よよや坊月  
 美代を視ふ日新や以海のそな  
 育やみのうせやも礼してふ管  
 朝鳥や操たる窓乃をさぐりき  
 一里ハ管ても藤によ愛乃新  
 曙にたち初るあまのう勢カ

義 碩  
 湖 月  
 枇 杷  
 珂 柳 女  
 李 丁 女  
 世 万 雨 女  
 素 吟 女  
 雨 笠  
 壽 三

冬志より佛ハふまきさうくうな  
 阿礼さそをむと居るに新出の勢  
 遠風やいそくくそな新あう新  
 死やら魔の跡走めうさる慈哉  
 志のむもや百のふるとそむ美草  
 帯来や阿るよまかせし育やう  
 紫陽あやたのしみ多き人のう  
 数うけや人めつりしく扱のさく

上毛  
 三千國  
 恭 雅  
 左 蕙  
 葵 荷  
 杜 宇 雨  
 伯 芳  
 樂 弓  
 龜 國







曉のうきりきりきりきりきりきり  
鹿乃鹿乃鹿乃鹿乃鹿乃鹿乃鹿乃  
啼啼啼啼啼啼啼啼啼啼啼啼啼啼  
あとおろろあおろろあおろろあおろろ  
お雲とて月の入るき果もは  
夏の月降とてやるは多りては  
新河漏の桜の道さことろあま  
きの月くれもろくねねや鳴るは  
山里や昔をやすむる益の月

夕雨  
可好  
白兔  
可雲  
奇遊  
唯住  
文蘭  
華鳥  
甲州  
嵐外

泊るよもあふく一軒を月の家  
きりくきりきりきりきりきりきり  
花と一はの葉を量のそれと危  
お一はや火とたのまき新向山  
樹影のまお急る月や梯や橋  
あとおろろあおろろあおろろあおろろ  
春風や筑波の宿のまおとて

信中  
春曉  
櫻州  
道補  
可道  
塾秀  
就下  
上毛  
一密



宿舎をくしうきり何は名の老る旅

奥州 冥々

。かしくつこ三日ありたりえさるるる

信中 布山

。見まじしゆのよきあるりこころ大

席雲

。松戸やとくくり明て山くもき

東丘

。枕して菜のむんくもひさる家

一秋

。幅半るるのけしきをこ動く也

長中

。虫あやるるれのみんもか酒壺

和川

。尺まわりせ入一羽ありたりきやげ

水馬

。妻の目よ人のこころいさほくも

五島

ありるにまじりてお入

東宇

。映らんときれは明々り本をきす

吟江

。用のるき人の来に危たるもの雨

思山

。子又けやきやをあるるのきりす

雨夕

。けあふ芥は葉をや心とま

大忠

。たるれ家いあうかくへつを黒羽

素夕

。初半や直路通りの杉ひと木

帯松

。危ほくもその美風よくたれ危

其山

。筆をとりまじりてお入たり

紗文



くねくの田をめぐり飛ほさる哉  
は多くと人をも又と侍あつさ代  
希しきとやゆえん世日の竹は月  
の空棚や志水と古き世のたれ終  
。 疾風よみ我を吹阿けれ山路ある  
凡中風より高くまはりたり

外山  
方居  
可文  
松白  
艸衣  
買山

霧の山の暮屋にたを南りぬ  
通にたれやと侍なり月や侍

甘谷  
一雨

啼しきや舟の糸は月にとちる  
登る床して旅の糸と世や友の月  
糸うらと世乃ちうらと競馬  
友めきと世乃ちうらと競馬

梅月  
萬好  
月見  
長和

怒るまき勢ねとつれ多うらき  
枯らして又訓ぬ山とたきさる哉  
鳴動しよ志とあやむ程のねるある  
あうらとたきさるまきの程かな

江州  
蘓孝  
厄中  
浪兔  
貫歌



枕ちうく落葉よせりおのふ  
何よりを面白くせん秋一と社

新 都石  
信中 暮秋

夜のなるたると夢なるぬ月全智

京 五芳

鶯のや 日影をさうく啼くともさあ

信中 菊光

障出しをよく見て床たうおのぞ

士謙

山里や日の入る家落しとあ

岨岩

子規をうり子後片ハ曇りたり

龜遊

呼ぶとも妻の色をうりあ葉を

甫山

法人の跡をぬしけりたるのを

雀郎

山をく又くてもある月おのそ

ふと根

鶴飛つては心の心よあちりりぬ

馬南

大うらハ月およちりし秋葉乃を

蓬水

露の朝をさきさき色をうめあま

仙露

又とくらのいさくおを聖の小るを社

艸雨女

柴の戸や木らけくもさく友の月

曲泉

晴くもあの方や月海く

潮路



めけや舟のくまり秋のたけ  
穉子集をむに海阿りお宿の宿  
さびしきとれらをひかぬその家

其尹  
曲河  
岱雨

落の雲をのこしめいそままる夜

去庫 一州

襟もとのまろくめやまはの阿免

信中 如雄

まろくも秋をさるりの蒼を南

遊水

。暮る由や水食くらふてむくまらぬ

吾州

太刀をもちて蹴爪をさるる也鶴阿せ

三彦

立よれ、妻の色をのちゆき菜畑

芦雪

をよこも恥るいそをくしあ仙也

雅素

梅り香よ心高たるはけりあ友

有栲

濡て来る人十田植の風情をり

文思

。何ひとつ買さる人もさし一の市

五柏

柴の戸始好月を梅乃を修ひ免

文歳

明けや木に馴るは朝まろ後

接江

空を飛けよしあしの風の有

旭光



わー啼て夏さきまらぬ枕あま  
長采さや何子あそふもをそふ  
永日やあまなる影を夜水の泡

里明女  
雨紅女  
文繩

寐るぬるハぬとわれよきり  
蘇の何ふし山の曲へをいそき危  
夢何うさもちのいほとさうに危  
朔日乃月をえくしあよ留子智  
鳴むしを舞う水衣の陽田もさ

麥二  
如毛  
争茂  
菜成  
市仙

今朝の雪をまけく好も絶えたり  
あし又まらるる三井の沙僧達  
急やむらし世をうつ浮のしき念  
見つゝもて野きく猿やひる伯  
猿どりもあを阿ひる影昼寐時  
貪らぬ音をこ潤乃日くらひの奈  
夕をさぐる今宵おさの文め我  
家のこにかくを吹くは秋の風

露さ  
知足  
如蓮  
露き  
露磨  
半古  
三机  
雲帯



鶴の啼聲をもちてあまのこゝろ

仙臺 可里保

。あはれ〜は名もささきまはれなきりて

信中 云鳥

やふれ戸は鳴きまはれなきりて

彩雨女

。一しれ志て八月さき竹の若

歌石女

淡柳を鳥の喰ふ寒くこの柳

樗老

焼ふささくあつれとらき心あ

長系女

白梅や風の月うきうらうらき

心齋

若くは鶴の尺璧花々を五月雨

蘭雨

汝う世の子あうきなり秋の水

九谷

蚊の音はちいさくあり月夜哉

一秀

。あつ〜ぬあつれいよの音

東白

。人をけしつる黄鳥のえや〜

李仙女

鱗のあつれとらき葉の静あり

鳥皇

山深や竹の毒日あけ

楚人

うつく〜きまはれよまに秋の音

支月

。手枕や〜つよあつる鶴の音

驪風



子よのむんほとけのむのらしき  
 臣物  
 粧別回と暮の阿れかし免ほる  
 素弓  
 朝雲北嶽又うさ南里ぬ大井川  
 桐東  
 竹林や坊主子ちりし卯賣  
 一圭  
 寐やは帯て人ハおたり菴此月  
 一水  
 明寺のあれし修るり枇杷乃花  
 北月  
 米出して泊人阿り新めうせ  
 東枳  
 冬の田や五株通りり藝  
 文鯉  
 寐てまはあうのまよるぬ所  
 榊春女

花ハま花月をほや阿りまの松奥  
 素枿  
 風のゆか山むやん鉄くりぬ  
 越鳥  
 月修て世のふる秋をよき社今り  
 安きら  
 住持の家ハ蒲よ形ほたた新  
 山丁  
 白梅の阿らるるもまうぬと危  
 新  
 仙鳥  
 正月の梅茶うるく屯山家の新  
 出羽  
 三夕  
 野ハ日し本陰あうくを反格  
 信申  
 悟玄  
 ともあうれそのもあせさき暑う奈  
 熊耳



故のきり又園のそとものほ  
秋のそや山はま松は六月あり  
叶もや葉も人をもたえ  
五月雨や柳投つたの筒井筒  
るのふやふといふを啼羽ぬけを  
あつたはも風あつちり後後川  
朝露の跡を吸ふ露の香  
るの月あふるやをささく  
秋風やきよのちり山を

素谷  
斧仙  
我達  
五仙  
打睡  
李溪  
巴江  
千頂

けや夕日とほきふ不社  
八月に写よは小田のふり鶴あり  
お晴れてきくさあさるり竹の葉  
にほりや梅は松のほりわけ  
九月もやと食の葉のおもい  
秋もやその谷おとるり又  
山越や夕ささりしは秋の風  
鹿きこにりむらあ山や

犀宇  
桂花  
有功  
夏乙  
孤雄  
素長  
天龍  
一池



人志ふに忍々如くしあはれり舟  
雪の香子志つらんむやふ山後代  
かよの夕しして禁火心よ秋の雨  
松風子睡やまらふをさうきま  
三月月やまらうけのるいと過ぎ  
冬をうらふも薄き入日の那  
静さよひまは月子あまら  
曙やぬるむ神甲の種おほ  
飲食よらるゝてんそも船のれ

知柳女  
窓竹  
花遊  
玄路  
布墨  
黄鶴  
有斐  
文鴻  
地遊

菴坊を極湯社と称し一なり  
雪をれてきかぬも淋し閑古鳥  
半乃脊又けしきの雪や黒木賣  
雪に殊をの阿南りや終月  
夕和や機にふもる琵琶の御  
お又火を禁しあざ阿里の人こぞ  
明月やたふれうつるをらあ

在信陽  
東都  
雅重  
十考  
百語  
茂松  
龜汀  
曉鳥



釜うけてものいせせたり冬薪  
を免てを秋樵ハ由る勢とし本樵  
立のへりハ社の鐘きく山さくら  
白梅の秋香をよそへばの暮哉  
あはれを花野のあしたの毒の雪  
物託る念のねとに居るこちたり

素儘  
踏方  
花牛  
芳尺  
文英  
一箕

。 綾子唱てうつて笑たり言教の山  
虫をりるたよりの中よ飛ほたる

在信中  
牛十  
其龍

さし舟のなをとおもて着に危  
を流りく着り暮もいと日哉  
舟よ癖のつくや志いどの心  
郊のむの宿やハ社行忘れ種  
かさくさ衛士ら禁火も落葉化  
日長くやきくよりるこ小ちるつき  
又の秋ややくく暖塚の住とる

潮雨  
文圃  
汀字  
三逞  
紫石  
都雲  
石亭  
長崎

とし女のねみ満る山乃月

信中  
秋  
文明



白蓮子恥ぬこころの秋まの素  
何より向てなく鹿乃きう遠き  
淡きや一時よりおぼし秋死  
雪のきやあひらきよ中ノ痛入  
錦もたぬ旅をいとおもへんか

素山  
文哉  
路周  
舍月  
相州 玉珂

尋常の心離れし梅の柳  
法多きも思自いして多し松の毛  
中の子孫家立たけよあまる哉

信中 羅文  
百甫  
五窓

白妙の雪やこれたり梅の春  
冬にぬるや梅はふりとの宿日和  
曉やあきらましくこころを柳  
春風よあはれおくれはるりたる  
秋のあをひそりよあふるあま  
阿ふ壁の風尖るり冬め月  
ふ別の外を橋よちら秋たり  
るうぬとて後をきく秋は固燕

可雄  
固松  
双竹  
柴里  
素遊  
一知  
秋 超悟  
兄次



萬葉よおかしおるおるこりきり  
 友の聖やあのみまけ花雪の露  
 秋のきりーいふまはれぬ山の月  
 ものゝ香も吹るくしなり秋の風  
 正月八日のくらもたも面をくし  
 敵も友のむしこころいふ便也  
 稻のをほきせぬ白ひふくまたり  
 共一さるはあてとも春の待久し  
 氣をもそくする秋の麦秋の日和

近嶺  
 雨葉  
 雲里  
 二鳥  
 龜文  
 汀路  
 九波  
 尚曰  
 芳竹

ちうちのさや秋の志をば未槿  
 穉みきく夜秋何社い志そふ如歸  
 雨のねやは志つらさを唱田螺  
 山ちのほとりの籠子の能始成  
 春のねハ常さ之嬉し者め有  
 ちた唱よるねういしたり文桂  
 山吹よあ香ちりきやう花友り  
 塊とりんきや田螺のうこきん  
 峯のち南きの麓ちり寺やしき

文考  
 庭可  
 松哉  
 東翠  
 文蟻  
 鶴里  
 芥路  
 一枝  
 朝真



あゝるしとねの戸の時は時を代

越後  
祖明

きく秋の白きにこもる物も哉

信中  
龜谷

雪の赤うたのそとと軽のなま

凡雪

雪も何りきうぬ人何里松能

更山

降毎に湖も赤や何処乃んそ

双月

ねちついで秋の山や木もきくは

千舟

春もや春乃より一き山畠

稻水

り秋はあきハ野山又さこ浦りぬ

吾竹

朽くちんま入日お桐とちんは危

松下

極くくちんまのあまのあまのちりし

異文

春は日よ施ひあはれ又さこ

一馬

秋のるまをいさよまにふりて危

白理

凌雪や外よ又何ふおいとちんま

二孝

雪やきよは山もくちんま

氷母

暑日や陽ををきよまのたの

雉隊

何と追て家鴨もさくも新胡蝶

相州

越後



風やそのうけもなれし山  
脚阿うしもよゆき者よ大所構  
多のせしく麦萌老我夫婦我  
冬晒や飛さし梅のたぬ茄子  
佳しや花ありさ田のたし炭  
たねのふ用るき人を開うはし  
水仙やあふしの中咲咲あし  
一葉よ麦萌うこい草にあり  
おまれてる合あつたけよそよき危

信中 可長  
古東  
其挑  
斗明  
単里  
杜喬  
竹母  
双鳥  
明頻

寒きや何もの日和の影なる  
雪もやうしるあわせお山の家  
朝起ハ鳥乃きん持あき乃る  
竹又若やあましよき友の音  
雪をめて鐘よなるる雪よ奈  
萩のかおぬれても鳥の気色我  
まふや雁あうるもあめ乃と社  
まふやむらむらむら枯涼し

越後 白娥  
清雅  
踏文  
信中 一雄  
羅来  
身路女  
可鶯  
東紅女



水子のるにちきさやさうさうな

壽南

か首おたらん子ゆりのうきき危

素臺

。雪解のあうき程ハ喜もたきし

元芳

山阿社ハ里子あるる葛妻のむ

緩貞

冬の日お心やきくも夢にんま

東陽

尾張

難面をわぶしよたてり鶴江を

雲浪

信中

志くれけ山のあうき社もくき

卷母女

船山やあじしるらたを侍の風

月臺

岬の雪を舞うくさ消よあま

其白

。紅梅の雪を吸らる雀の形

哥清

青梅や戸田の川辺みるあま

夕雨

夕立やとく空あまて志つう也

弁六

大坂

山の雪を芒子粒をよまはるくも

竹摩

信中

藁や人乃森さあハ事むつうし

素英

押よせて来る程有るり年の暮

双山

。飛鷹子家のぬくま、日和りの奈

可梁



赤糸をくらははやく之白麻  
 有るれの糸ひとほは又棚引の如  
 山里も糸生入人糸色やましくし  
 聲も一の折く来たり夏の月  
 埋火を路せし言消中ある  
 雨りきき飛禱の山道日暮ぬ  
 舟の子や人乃音つゝあるを糸  
 のら猫乃糸といあまりにくく  
 水多糸一の糸ちとて流るり

梅亭  
 左凌  
 素林  
 云亭  
 葛人  
 旨山  
 左溪  
 佳久  
 巢胡

雨の目糸芒をさし社に地もさく  
 山茶をしの者乃佛くさ風々り  
 風は吹急と良ちたる野村の菊

吾龍  
 言可  
 二蝶

鶉のふくして度るわう菜かし奈  
 其翁乃名よあるを糸在所哉  
 鶉たももくけハ河は十夜ある  
 糸の糸よあるはくしの虫失てたり  
 糸の糸ハ波あつゝひやくを啼子智

大坂 長齋  
 信中 大暁  
 南島  
 星守女  
 考



藪うけや 絲瓜いづのを秋のまき  
 何れもあまのぬまや 雲えさけ  
 飛ぶるまに 雲を暮れ 枯尾む  
 梅佛つめたくなるよ ねちりお楓  
 はくしー 菊の軒 六さそひさし  
 雲霞のたのまを 流る垣もなし  
 枯尾をすけをき 新を恨も免  
 受けもあく門のさつきや 雲の初  
 秋のこゝろあまのまかせるま

文久二  
 圃水  
 百川  
 芦川  
 三生  
 素朴  
 柯曉  
 祖三  
 于雪

言葉あやむのまは 畑立を何れ  
 硯心およせて 子をまきく 新哉  
 山峰の雲を 夕てたり 女郎む  
 皮豆代乃 赤いさ 赤近そ 小夜時ふ

竹望  
 八儿  
 五遊  
 梅七

傘のらく 風をちる 新おのうめ  
 け新や ぬくく 通入の家のまき  
 角力取  
 松風よ 白い 掬よ やる新乃まき

榊莊  
 希言  
 五什  
 芻五



何を管ふちうそそ雪の鳴き守

阿波 壺大

楓雪の志あふもなや冬の月

信中 雄車

蟹の身はもう神ぬ情を待よ免

素雲

懐ふささくりて見たる春の風

寛尔

春の葉や草山吹乃そりそ

画溪

梅の香の息しくなうて暮に免

斗月

雪や又も神こゝろ乃凡

波翠

○三日月やこゝろくさきあはるる

圓桂

曇る日のきみおにうるあつさ哉

越中 壽水

掃よせて置え時を乃菰松葉

信中 蘭中

雪を飛て晴るくそ色持てまのち

布川

松杉のたさうそこのみそ砂白

叙 芳丈

同じなるく潔よきも此田植頃

朱毛

涼と切やきみおれやうたさのいそ

塾暁

梅の木を指しをちうらむを翁

黛山

起くの心をさしやうの死つたさ

古友



啼<sup>レ</sup>けて存<sup>ル</sup>ハ<sup>ク</sup>ノ<sup>ミ</sup>ぬ<sup>ル</sup>春<sup>ノ</sup>氣<sup>ヲ</sup>  
鳥<sup>ト</sup>も<sup>母</sup>寫<sup>シ</sup>又<sup>モ</sup>鳥<sup>ノ</sup>鳴<sup>ク</sup>梅<sup>ノ</sup>宿  
異<sup>日</sup>や<sup>又</sup>花<sup>ノ</sup>散<sup>ル</sup>人<sup>ノ</sup>去<sup>ル</sup>後  
梅<sup>ノ</sup>枝<sup>ノ</sup>の<sup>影</sup>も<sup>春</sup>々<sup>々</sup>里<sup>ノ</sup>林<sup>ノ</sup>樂

<sup>イセ</sup> 南江  
怒柳  
歩雪  
井泉

交<sup>フ</sup>子<sup>ノ</sup>の<sup>句</sup>いに<sup>傳</sup>ル<sup>人</sup>こ<sup>ろ</sup>  
暑<sup>日</sup>や<sup>り</sup>り<sup>と</sup>寐<sup>乃</sup>着<sup>て</sup>睡<sup>れ</sup>れ<sup>後</sup>  
二月<sup>ヤ</sup>お<sup>月</sup>後<sup>々</sup>々<sup>々</sup>宵<sup>も</sup>夜<sup>は</sup>  
け<sup>あ</sup>は<sup>嵐</sup>お<sup>と</sup>る<sup>や</sup>冬<sup>乃</sup>月

斧山  
庭山  
錦水  
ほら

舟<sup>ノ</sup>の<sup>葉</sup>を<sup>お</sup>と<sup>る</sup>と<sup>た</sup>れて<sup>又</sup>世<sup>ノ</sup>危  
此<sup>所</sup>也<sup>や</sup>心<sup>を</sup>た<sup>へ</sup>て<sup>ハ</sup>何<sup>レ</sup>其<sup>ノ</sup>花  
舟<sup>底</sup>そ<sup>う</sup>し<sup>り</sup>啼<sup>く</sup>と<sup>る</sup>杜<sup>宇</sup>  
う<sup>け</sup>け<sup>く</sup>と<sup>寝</sup>る<sup>を</sup>の<sup>力</sup>を<sup>裁</sup>  
ひ<sup>ら</sup>く<sup>は</sup>又<sup>む</sup>ら<sup>む</sup>ら<sup>む</sup>日<sup>中</sup>に<sup>は</sup>  
け<sup>の</sup>夜<sup>を</sup>も<sup>た</sup>日<sup>程</sup>ノ<sup>啼</sup>

<sup>上毛</sup> 文螢  
<sup>秋</sup> 文桂  
<sup>イセ</sup> 崔非  
魏湖  
民止  
非石

襟<sup>ノ</sup>の<sup>葉</sup>を<sup>お</sup>と<sup>る</sup>恥<sup>し</sup>き<sup>住</sup>居<sup>者</sup>哉  
竹<sup>乃</sup>子<sup>や</sup>垣<sup>三</sup>尺<sup>能</sup>射<sup>る</sup>る<sup>事</sup>

<sup>信中</sup> 席嘯  
文素



秋の色をまき白きくに譲りたる  
 其風  
 膽をあら又喉を人の奈毒なる  
 其風  
 うつ程みよはなほさるるの雀の南  
 葛丈  
 心はほかに風のふくむり枯柳  
 雨量  
 何の山をむりよ又写るむとさす  
 鳥功  
 ひり越りよと奇斗るり冬本立  
 素川  
 春をあら又ふり候さるし程本立  
 石悟  
 何とるよとまはゆく又重る楓代  
 龜施女  
 春一もや山里まても打曉し  
 文條女

船又麻てきうそや原广の笛子多  
 蝶女  
 症は時ハ麻ようしる乃砧うち  
 雄之  
 風の吹を秋とそはるし冬雪山  
 一鴈  
 瀬新やる佛のうけ乃お後免  
 雲橋  
 黄うつみにある人強てきりく  
 播州  
 布舟  
 歌よむと位とるるり魂まつり  
 信中  
 素時雨  
 山のくを雀もまめよ案乃ら社  
 一中  
 葉咲やまらふてく身借う笑  
 李雪



落うての月冷しき雲散の奈  
 山橋尺とけてくさる暮もあし  
 暁や水邊にそくちる子鳥  
 雪や葉あさくあれいなきた事  
 阿まのる舟ハ松より聲どくき  
 はるきねとあるお嵐の寒念佛  
 藪るの歌を忘れき乃言の事  
 思ふよりつたるを結ばくはの雪  
 船方や拍のをもハ小糖あ 免

蒼翠  
 千雲  
 指桂  
 既雪  
 入左  
 孤高  
 一丘  
 路弓  
 一輕

此はの冬や久しき梅 秋を  
 菊子乃つれをいはまきある事  
 手のむらぬ霜もはるの白ひ哉  
 餅搗方焚火よするや大きく賣  
 むらるの奈もくや種ふく  
 此はや 霜もきませし 花の秋  
 月々宵秋の七針の巻ひたり  
 きんさのきや嵐もなるぬね能る  
 ちるた飛や舟の痛名此忘れ写

蒼路  
 汀雨  
 五風  
 霜布女  
 真双  
 陶居  
 文東  
 艸二  
 菊二



。さみたれは泊えけり新佛式

似月

菜のむや袂をふるふ山法師

了馬

。感葉の香よる襟れうつく式

五溪

。雪の峰何そ降る花を色ちる

大器

大むくし悉しと写るほさきす

左井

。楓や尺く入新日かた大板

九塚

むくの写字のうへなる所を存

備後 對竹

。あゝに齒くき志川うとまはり鳥

信中 荷水

秋既よしなる事其のねよりな里

素文

。夜阿ふしに月影までもゆきり

千月

。身又老を法を社と情の穂悴

我汀

。雨晴て解れさうさる梅を色は

佳夕

。緋の巾日わたりやまちるを結

素岡

。押つめて形もあまのさの香

潮月

。春の雪人目志しは又見た出ぬ

蕉良

。る乃田鰐を此志法うきを写報

千可

。山風忠つきせぬ夜あり后れ有

眠之



梅うきや、痛おしきき云人の心  
何島お志らぬききく春の山  
写や鶴化り何ししの山をさけ  
源一さや水田の長周乃ひさの家  
古寺や花火子まの山お流し  
鶯託をうひさく一鄙のまは  
写写や山のあさ日とあ  
藤のむよふるまはちうりききま  
をうしき白い毛をうてむまき

方雨 素岱 彩里 橘葉 島江 吐流 苔路 来藝 櫻堂

冊口

日此何んをなりを曇る桜哉  
さうけて板つ弓弦や妻方風  
煤拂門のさく人嘯勢あり  
山街お足ほちりて来たたり海を  
このききれなくなる村を思見我  
初村やとりも樹に嬉しくるさ  
大雪に似えん春色をちりり鬼  
白きくの白いふりけ日和の奈

信中 新 嘯月 文海 一左 里丈 文州 文老 左来 圃秋

冊口



淋しき八家もあるなり秋のる  
まの柳又秋ふりの眉を曲つり  
七夕やおもひ揃ひくし望乃露  
動く起まらるる宛入なりあれたる  
楞堂やきり白妙も焦れをき  
梅まきしおる心はるるの塚つて死

桂支  
李杳  
凡營  
文登  
東河  
斗樂

朝露よりきくと日ほととぎさなり  
朝露ハ啼ふてうへ人をもをりし

信中  
天朗  
乙堂

阿弥梅るるのゆふへと暮になり  
曉乃柳又雨をふく世々の那  
夕立やふるきききしきの三朝露  
系片きき山のほろも是より持  
二三度も落葉ふりしそ小軒雨  
秋の山ちるめは佛の道にたは  
法也くと鳥いろなりたる茄子  
くら実や実入果ちきゆふ実

桂林  
玄之  
素九  
雨曉  
株庵  
来蕨  
鳳也  
席孝



仰空や眼より血不程月一葦  
 可曉  
 夜歩りも久しくふりて冬乃月  
 一白  
 月影や永より尺よこ交木立  
 秀曰  
 夕立や尺るまに丈はくひとけき  
 自峰  
 雪の寂よ朝日かこたたり  
 井詰  
 風や木を角そむけて春の春  
 素外  
 志れ程の啼蝶よ夏のふりこの春  
 文雅  
 鶯は夕月の里よりうつりたる里  
 莊戸  
 妻るや晴ごみの後乃雪此みどり  
 吟水

秋風や夕月てり也舟の春  
 寸丈  
 懸て目の匂い今りうめ此を秋  
 花香  
 きりくはる乃脊中よりなるも冠  
 槿馬  
 舌啼や春の鐘きく就まら  
 松契  
 瘦るものくうくはるを記那ふ哉  
 文貫  
 白又痛ぬおとちりに鬼寺の月  
 白太  
 心よき程よあ茶の目初可有  
 素江  
 初桜君うはむし乃痛楚か  
 可雪



かきくはきくは水と曉に危  
宵のるハなるぬとけりし杜鰐  
也の雨傘さき程のりもは  
初茄子又ふにむれあき南うそ  
美舟やきぬ直海乃林舞寺  
いちとや志賣来りり冬の中  
送火やわしこの林おひき  
時をねぬうち又晴よりし  
白牡丹ふふ志ぬちりきこそ

耕雨  
買露  
亭山  
箕三  
双和  
其汀  
壽鳥  
吐雪  
文由

昇の戸又雪を写してとるこの奈  
ゆるまてよく写像よやくの阿免  
尺くもよる初極るるや山姑寺  
り秋やと初たを系程る此降  
若きまき日又冬これの阿井あま

文雪  
鳥露  
文河  
甫竜  
志良女  
自徳  
如言  
舎孝

信中

近江

大



徳子と記す日の影をよほ社て免  
け存や掉りてもゆるぬの存  
あつとと夕のさくたり山のあ  
思ふ程をらぬ時ふにやう社をり  
蒼蒼やまよふ時とて暮の光  
あつととあつととの影も時ふ見  
雪焼て畏にそれたる暮の程  
小梅の母の影のむらう社をり  
梅の菓を縁て縁と遠れたる

美三  
圭雨  
二考  
此文  
云大  
林孝  
其秀  
左良  
貞器

。さ月のちいさくちりて落る代  
ゆくの色あり暮の小松のり  
山寺のふそめく暮やさるる  
良き時やまよふとき中日のく  
松風もつきぬ時よの山が哉  
時ふして宵の寐れ枕をけし見  
隣にききあり中たり何さほらけ  
茶の香も風はくもみもさるる  
梅乃存ありとも人の事ぬね哉

吾老  
我雪  
五孝  
文朗  
利川  
杏雨  
隣我  
蘭哉  
甲州  
在之也



雪の日也梅初子信た新小路  
人乃老志社とまよふのさくらの春  
水を花浪之れはるをさしり  
月や春の木の石に鳴やさき若鳥  
あそび志を信よりたをさき新あらし  
花解をさく人たりたりを拂  
空花よるの志のりをさる日哉  
よくさくらくく隣のうけ葉哉  
鈴鼓いぬよつら新を初る

春堂 信中  
花厚  
三白  
雅彦  
寸雪  
米圃  
文山 叙  
長河  
渚柳

日志新も埋るはよめさこの春  
ひよりの春風のむらもほ子哉  
春馬のねそね久しや雪の  
ゆりむねを心にしひたり  
梅唱や舟義り春よ花はある  
古さとはいさしとさきぬ梅の春  
家人の身た春くたり志新さき  
新乃日志はを初る人梅るます

茂郷  
白藻  
春雅  
梅宇  
虎咲  
眠河 叙  
其杖 南部  
平角



赤いくも梅咲月とありに危  
 松さくもあつちく暮ぬ春の山  
 ほよとさす写しおふに飛ぶ鬼  
 小妻とてそまぐあるけい侍と  
 朝夕や隣の花とよろこまじ  
 別れのちや志づく面ふし  
 こそおとや夕より入る萩うり  
 初河ふし起流舟よりおのたり  
 括はつきひやがの冬とるるに危

其井 信中  
 素水  
 斗外  
 思雲  
 苔子  
 杏母  
 岩橋  
 左流  
 双河

可又似ぬとるの咲たり粟のむ  
 鶴の久しき春を涙い希あ  
 初つまや夜子して掃ちるるを  
 涼したに松のいほりと呼れ今也  
 夕暮や月母うこかぬ新ぼりし  
 三月夕や形を阿ふ礼の家二朝  
 ちれ書て名れハ膝馬の日中  
 家り希の志流りまけや春の月

可  
 文水  
 榊波  
 阿泉  
 百河  
 圃外  
 一空  
 文岱



物鳥りあり可成るるり北の坊  
喜洞  
昔の日の末を流白のや白牡丹  
四鼻

春の日の朝くふ来々や山形舟

京 田未

何りたけは物ちりくくるるる者

信中 楚江

心を死に写も之をまたれ危

言何

夏白や秋はあたりし風は

何来

松風は暑くも色いともな

景雄

山里や茶もむつすききの暮

秀山

夕暮れをよもよもぬ来海ありあ  
呂橋

雪の隙や飛もつくとぬ秋ふ雪  
吾雪

菊さして山の都乃知月可奈  
二芳

露乃流河のよれ葉は月露し  
一河

人の木ありをよむをくくるるる  
其味

戸をぬて柳の風を入るる菊  
宇川

春をぬやまの福をよもよも  
千加久

風のそよめやハセ入志まら  
李賢

秋の風象ころもてに吹られ  
千河



春もやと社へあき山の鐘

秋

龍波

そと形やまき日乃元あさひりき

西江

おろけよそよの茶を懐をるれ危

霞山

生るもれ放つう中に年より旅

路一

松よそへ枯野の色乃移りたり

亀白

煙火や百足の影し穂うら

竹居

そよの写る所も日影はくくあ友

葵光

若そのの夕日赤きりてうゆる也

芦耕

ねうせやあまは乃市の快をいし

量哉

。 さきのぬた風さるくよるふ也

回侯

爺波あり門をし事ううはは家

橘人

十月也雪りき雇ふ珍なりみ

家副

そよ入るくくあて人悪し

路雄

赤きこそそ前あの本意なる社

吟長

おのりろき踏あつたておろき

竹裡

梅の咲きたりうまゆる花の時哉

梅香



小杉引老いみどりよまろり亀  
来る程の人用をしやまはる  
櫛の火と脊中をえ来る程の  
情はめぐる日影をえまはる  
思はも杉も杉の中はまはる  
桐のを風をりりりりりり  
踏くく木の根つきまの杉  
落る日の山へたつる小英  
山吹のをにはおし志山杉

吟井 買路 此螢 雲英 淡如 知三 龜風 貞哉 芳雨

取巻て晩鐘清く記

西井

取巻てむしよを料  
書りぬ杉人よまはる  
枯き杉よりあまの  
風と際来るやその  
藿のたしは海くあ  
紫布志はちる  
朝のりり風かくる

和翠 竹成 似秋 寓来 雨夕 蕉戸 東器



柴又子問ははしむとあふへん  
山門の阿ふしよくを物程哉  
急なる世のちととさなるに危  
きりくはあうれくの程哉  
田畑するく程いもの事もむそこ  
終乃るをみやくだに後出ぬ

鳥朝  
可孝  
千川  
長可  
楚白  
車丈

崎捨おととあふしは子冬を記

江  
東峰

野六くくするた多おれ記尾を

信  
冠里

むしの鳴き声や火とよす山乃寺  
けろおをうやあふしき二百月  
きりくはあうれくの程哉  
けろおをうやあふしき二百月  
おれ記尾をうやあふしき二百月  
おれ記尾をうやあふしき二百月  
おれ記尾をうやあふしき二百月  
おれ記尾をうやあふしき二百月  
おれ記尾をうやあふしき二百月  
おれ記尾をうやあふしき二百月

冠可  
紫山  
寸山  
吟徳  
冠之  
佳山  
嗽文  
冠夕  
守一



昔の美乃思や日たへちるはき  
山風おとけ——き秋の日はるり  
人乃いふ秋の山の家久あふし  
秋をいふはるの程は風をちる  
法保姫の若美く——や春の字  
一真

可柳女

梅雨女

大素

花山

一真

傘さして山依来天く秋日和  
秋の日はたてこひ——くちるに危  
山をよみはるおたへく——春の字  
春翠  
梧甘  
文路

湘州

春翠

梧甘

文路

為とらちるちる梅くははまぬ  
十のちるちるちるちるちるちる  
山をよみはるおたへく——春の字  
人乃ちるちるちるちるちるちる  
ふくけや鼻の尖まてやこれ除  
竹園  
苗代やそのいそ——めけ一たのり  
春の雨あつちるちるちるちるちる  
記冥

九皋

蕉雨

微山

櫻波

湖光

竹園

文秀

記冥



蒲公英や花を採つるの如く  
夏衣衣をも志あるも安し門の存  
素流

崔若く新のははふ梨志くもなめ  
雲地

五月もやふくた乃花より日陰  
可明

けまや花をたち又は桐の如く  
麥雨

静さや花の如く火乃を如く  
文馬

山里からしよき哉と花を如く  
百五

雨の降るるにつきて眉おとし  
考

まのや花を如くぬれももを如く  
犀河

山吹や花を如くつるる如く  
東戸

花の如く花を如く花を如く  
如柳女

晴や花を如くつるる如く  
素月

る晴や花を如くつるる如く  
風日

ひまもつらめ風を如くつるる如く  
阿多政

蒲らの花を如くつるる如く  
方水

常也門乃花を如くつるる如く  
艸母

さしりる月花を如くつるる如く  
橘左



菅子留あくれしうらぬく  
梅の香やにほひまほも新あけ  
新ちりし梅の香あつらふ  
郊燦々猶つうれてねあつらふ  
白きくハ枯て志あて白む我  
あくむあめめめめめめめめ  
青柳のむめめめめめめめ  
あく梅子のそく梅れ白ひあ新  
ゆ美やけ人あきたならんを信

東水  
雨林  
汀鷺  
指空  
之祐  
文岡  
机文  
以白  
双雪

水仙や入りの何と升をくん  
風うきまよふ乙多あけ東あま  
流るるころ嬉しき梅あな  
梅候や海山うら村の里の梅  
鳴りいれ山夢子今り宋古を  
月あいのむしあもあやあ  
星候て麓れう松や志くれけ  
松風の落てさあ今りきり大楠  
雪解やくれても志いしる雪

方雪  
斗井  
二龍  
柳花  
林々  
春菓  
一帆  
可中  
斗真



推業のあましりまのあましり哉  
馬毛  
鶯に草のつけあましりてなり  
藤五

菴の舟文書きさやとくしり  
馬臺

人好日やふく葉の松も喜ばる  
治泉

文部之言をたあじりやふく喜  
武曰

まつとらふくちよ終くは喜  
鳳秋

雷割の松うれやあましり  
蕉山

身むかしの暑をさすなり  
席杖

し



